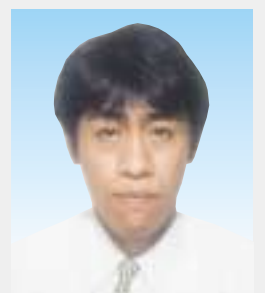


豊かさを実感、「源流の森」の休暇



コテージ

(株)緑のふるさと公社

早川 丹

国道113号線の手の子交差点から中津川、飯豊山方面に向かう県道4号線に入り、山々に囲まれた集落の中央を流れる山形県の母なる川最上川の源流・白川に沿ってさかのぼり、その周辺に立ち並ぶ民家を眺めながら、さらに南方に進み、屏風岩トンネルをくぐると、それまでの風景が一変、左手に壮大な白川ダム湖が目に入ってくる。ここは、磐梯朝日国立公園の中ほどに位置し、日本百名山の一つに数えられている飯豊連峰のふもとに広がり、日本の山村集落の原風景とも言える大自然と森と湖と茅葺き屋根の家の美しい景色を見ることが出来る。そして、そこは中津川地区であり、源流の森があるところである。この地区に白川湖畔交流宿泊ゾーンが二年前に設けられた。源流の森、白川湖畔全体の中で保養と交流と宿泊とを目的とした施設を集中させているゾーンであり、ホテルフォレストいいで」とコテージ村「木湖里館」で構成されている。

かつてこの地区は、山々に囲まれた陸の孤

島と呼ばれ、訪れる人も山菜採りなどのごく限られた人々であった。しかし、近年の価値観の変化で、当地区の様相も一変した。当地区を訪れる人は年々増え、昨年は三十万人以上を数えた。人間は、本来は自然の一部なのに、今の社会はそれから隔絶することを基本に成り立っているかのようなのである。ほんらんにする大量の情報と、目まぐるしく変わる世相、忙しい仕事に追われ生活が単調化していく。見失いそうになる自分を取り戻したり、家族や友人とのきずなを取り戻すため、当地の大自然の中で、ゆったりとした時の流れに身を任せリフレッシュしたい、と思うのは当然のことであろう。森の案内人、インタープリターといった山の自然をガイドする人、森や湖での生活体験を指導する人も百七十人を擁するまでに増え、受け入れ態勢も強化されているのである。

また、地区の中心ともなる白川ダム湖畔には、その景観の美しさに加えて近年、自然と親しむための各種施設が整備されている。

オートキャンプ場をはじめ、白川温泉「白川荘」、三〇〇〇立方メートルの雪を貯蔵する雪室、昨年オープンした体験農園、パークゴルフ場、釣り堀「ツレット」、広河原間欠泉などである。周辺の景観に配慮し、構造物である「源流の森センター」、「ホテルフォレストいいで」、コテージ村「木湖里館」とも木を基調にした造りになっており、ホテルは白壁と木、コテージはログハウス風に仕上げている。いずれの部屋からも雄大な飯豊連峰、白川湖の湖面が見えるように配置されている。

特に、近年のアウトドア志向、森林レクリエーション熱の高まりを受けてコテージ利用の稼働率が高まっている。コテージは全十棟からなり、プランや人数に合わせて二タイプから選択できるようになっている。コテージ内部の設備は、照明、冷暖房、キッチン、バス、トイレなど一般家庭の設備と比べて見劣りしないものであり、清潔で快適な滞在を約束している。ホテルと違って独立した建物になっていることで、「別荘にきた感じ」とリッ



湖畔に広がるコテージ群（コテージ村「木湖里館」）

ちな気分浸れることが人気の源のようである。ホテル宿泊を望む保養目的の女性層、シルバー層は深い緑に代表される景観や山菜きのこ、飯豊牛に代表される食の味わいを求めるのに対し、コテージ宿泊を望むのは若者グループ、ヤングファミリーが多く、森林浴、自然体験、家族・仲間の絆の再発見など、「心の豊かさ」を求めているようである。いずれにしても、訪れる人々が求めるもののキーワードは「本物の豊かさ」であるようだ。

最近、人々は本格的に「豊かさ」を追い求め始めたと言っ感じがする。お金はもちろんだが、もっと別のものが欲しいということなのだろうか。求めるものの何かが変わった

てきたような感じを受ける。お客様のニーズが確実に多様化してきているのである。豊かさを実感する尺度が多様になり、本物志向が強まっているように思う。

現代人は何が欲しいのか、あるいは何を充実させたいと思っているのだろうか。一般的に言えば、

お金、仕事

健康

夫婦、家族

趣味、学習

ふれあい（豊かな人間関係・自然とのふれあい）

社会活動、ボランティア

という六つを挙げることができよう。実際はそんな単純なものではないのであるが、欲求の基礎にはこれらの六つがあり、いわば「一石六鳥主義」とでもいうような構造になっているのではないだろうか。つまり、特定の趣味を持ちながら、その趣味で夫婦・家族のきずなを深め、共通の趣味で友人を作り、ボランティアで社会参加し、生きている実感を確かめたいのではなからうか。

そして、そういう志向が観光行動とどう関係してくるのか。もしかしたら旅行をする、あるいはホテルやコテージに泊まるということとも、単に「旅行する」「泊まる」ということだけでなく、旅を通じて六つのいずれかを豊かにしたいと考えるのではないだろうか。「自然体験ツアー」とか「ボランティアツアー」という大きな見出しを雑誌や新聞の広告欄に見ることも少なくない。大自然に抱かれて学習したいし、ボランティアをやり社会参加したい、そして家族や地域の人々とも触れ合い

たい。など。そういった複数のニーズをもつて、それを満たす旅に出かける人が増えているのではないだろうか。ということは、観光地の受け皿となる地域では、観光施設や宿泊施設を整備するだけでなく、地域全体でこの六つの欲求を充足させることを考えるべきなのかもしれない。もちろん、休みたい、癒したい、というだけの気持ちで旅する人もいるだろう。しかし、その心の奥底に潜んでいるであろう六つの欲求はどうなっているのか。それを探ることに今後の観光産業の在り方を示すヒントが隠されているように思う。これからのレジャーや保養や観光の形態は、時間に追われながら名所旧跡を巡るレジャー施設で遊ぶだけではなく、また、定められた一方的なサービスを受ける形態ではなく、自分自身で時間を過ごす場所や方法を決め、食事や体験メニューを選択する「手作りリゾートライフ」を楽しむ方向に進んでいくのではないだろうか。

早川 丹

緑のふるさと公社・ホテルフォレストいいで支配人

〒999-0423 西置賜郡飯豊町大字須郷421-1

TEL 0238-78-0010

<http://www.nakatugawa.co.jp>

自宅：長井市栄町12-24

1963年、長井市本町生まれ。長井高校、横浜商科大学商学部を卒業。1986年 ㈱ハイマン・タス・ホテル宿泊・営業課長。1996年 ハイマン電子㈱ 営業課長。1999年 緑のふるさと公社入社。